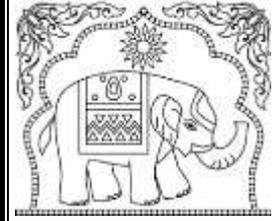


まいとりに मैत्री



No.21 平成 25 年 夏号 -2013. 7. 31-
東洋大学仏教青年会・東洋大学仏教会発行機関誌

< मैत्री > :maitrī (マイトリー) とは、慈しみ、友情、思いやりを意味する古代インドのサンスクリット語です。
仏教では慈 (いつくしみ)・悲 (あわれみ)・喜 (よろこび)・捨 (とらわれない心) という四つの広大な利他の心 (四無量心) の一つです。

公開講演・声明公演報告 ～声明というエンターテイメント～



戸松義晴氏 (左) と池口龍法氏 (右)

2013 年 6 月 1 日 (土)、東洋大学白山キャンパス井上円了記念ホールにて「平成 25 年度東洋大学文学部伝統文化講座 自心の源底を観る～大曼荼羅供養～」と題する公開講演・声明公演が開催された。講座は二部構成であり、第一部は講演会「エンターテイメントとしての仏教」が行われ、そして第二部では声明公演「自心の源底を観る～大曼荼羅供養～」が行われた。

講演会は「エンターテイメントとしての仏教」と題して、これからの仏教の新しい形を模索するという趣旨の講演が行われた。演者は本学の非常勤講師であり、タイのエイズホスピス寺院支援活動などを通じて「仏教者による終末期医療への取り組み」を研究している戸松義晴氏と、京都市の浄土宗龍岸寺副住職であり、フリーペーパー『フリースタイルな

僧侶たちのフリーマガジン』の発行などの活動を行っている池口龍法氏の二名である。まず戸松氏が仏像ガール、寺めぐり、精進料理などいま現在の仏教におけるエンターテイメント性を解説した。次いで非アジア圏では「仏教はクール」としてリチャード・ギアやスティーブ・ジョブズなどの有名人が仏教に傾倒していると紹介し、欧米を中心に大きく展開している仏教をコンセプトとしたバー「Buddha Bar」の紹介映像が流された。だがバー独特の派手な音楽や仏像の頭部のみオブジェなどが映された映像に眉をしかめる聴講者も居り、私は西洋において仏教はファッションや哲学であり、いわゆる信仰ではないのではないかと考えた。続いて池口龍法氏が自身のフリーペーパーの活動を紹介し、「お寺は心のテーマパーク」として 21 世紀型お寺フェス「向源」の映像が流された。お寺の境内で様々な催しに興じる参加者の姿は縁日を彷彿とさせた。最後に対談が生まれ、葬式だけが仏教でなく付き合えばプラスであり「仏教は楽しい」という結論で幕を閉じた。

第二部では「自心の源底を観る～大曼荼羅供養～」という題の声明公演が催された。前年と同じく今年度も真言宗豊山派迦陵頻伽声明研究会の方々による演唱である。先だって東洋大学文学部非常勤講師である田中文雄氏による解説「大曼荼羅供養の実際」が行われ、やがてスクリーンが上がりそこには「胎藏界曼荼羅」と「金剛界曼荼羅」が掲げられていた。ステージ中央には礼盤が置かれ、香が焚かれたホール内は厳かな雰囲気にも包まれている。やがて鐘の音が鳴り響き、その後ほら貝や鉦、鈴などを打ち鳴らしながら導師を始めとした職衆がステージへと上がる。迦陵頻伽声明研究会の迦陵頻伽とは極楽浄土に棲む



声明公演の様子

想像上の鳥であり、その美しい鳴き声が仏の麗しい声に譬えられるというが、その名の通りの圧倒的な演唱であった。楽器なども用いず、そして男声のみであるにも関わらず幅の広い音が聴こえ、ハーモニーが心地よく響き渡った。これぞ仏教による極上のエンターテインメントと言えよう。公演の最後には真言宗豊山派仏教青年会による和太鼓演奏「千響」があり、これもホールに激しく響き渡った。

最後となったが、今回の伝統文化講座に携わった方々に心から感謝の意を表したい。

中島耕太郎(インド哲学科2年)

【目次】

公開講演・声明公演	……1	アジャ・リンポチェ師講演会参加報告	……2
落語と仏教③	……3	倉田百三と西田幾多郎③	……4
興福寺の日常③	……5	タイの仏教事情⑤	……5
コラム「日本文化と仏教」⑱	……7	書籍・イベント情報	……9
今後の予定	……10		

アジャ・リンポチェ師講演会参加報告

2013年6月22日、東洋大学国際哲学研究センター(IRCP)主催の国際シンポジウムに於いて、チベット仏教ゲルク派の高僧アジャ・リンポチェ師による講演が行われた。

今回のシンポジウムの趣旨は、インド学・仏教学の分野で古代の思想・宗教を解明する手がかりの一つを言語と考へ、言語や文法の特徴を描き出し、その思考法まで踏み込んで古代アジアの価値観の一端を明らかにすることであった。加えて、この手がかりである言語を通して過去と現代の共生を考究するものであった。

師はモンゴル人遊牧民の家庭に生まれ、2歳の時チベット仏教ゲルク派の創始者ツォンカパの父であるアジャ・リンポチェ8世の転生の活仏と認定された方である。現在はアメリカに在住し、カリフォルニア州ミル・バレーに「慈悲と智慧のチベットセンター」(TCCW)を創設し、インディアナ州ブルーミントンの「チベット・モンゴル仏教文化センター」(TMBCC)のセンター長として活動を行っている。シンポジウム当日に日本在住のモンゴル人が多く集った様に、師に対する尊敬も篤い。

師は講演の中で、趣旨にある「言語」に関して、重要視される3つの音即ち、om(オーム)、āḥ(ア)、hūṃ(フム)を挙げ、それぞれが身体(身)、言葉(口)、心(意)と対応することを述べた。また、このaの音は言語に共通する母音であり、真髓の・中心的な(snying po)音であり、チベット語に於ける父(a pha)と母(a ma)もこのa字を備えa字で始まることに触れ、一切衆生を父母とみなす慈悲(Compassion)と智慧(Wisdom)の話へと進む。

師が挙げたこのa字は阿字であり、空海は『卍字義』の中で「阿字は、本不生より一切の法を生ず」¹と述べ、



アジャ・リンポチェ師(右)

¹ 密教文化研究所編『弘法大師全集 第一輯』密教文化研究所、昭和四〇年、p.536

又『阿字義』では「阿字は即ち是本不生なり」²と説き、阿字は不生不滅のものであり、ここより一切法を生じるとする。同時に阿字は「法身の義なり」³とされ、根源的なものであると見なされている。

私達の思考は、それが自己に問いかけるものでも、言語を通さずには成立し難い。具体的、抽象的なものも言語化して受け止める。その言語は、風土などによって規制されると言えるが、その風土などの認識でさえ言語を通さずにはなし難く、その言語を分解した際に共通する基本的なものが阿字であるからこそ、一切の根源として重視されるのであろう。リグ・ヴェーダの「ヴァーチュ（言語の女神）の歌」の中で、「われによりて人は食物を食す。識別する者、息する者、言葉を聞く者[また然り]。それと知らずして彼らはわれに依存す」⁴と語られる様に、私達は「それと知らずして」言語に依存している。だからこそ言語は神聖視され、その神格化されたものの根源とも言える a に一切が含まれているとまで考えるのである。

ここでは、師の語られた a 音と言語に関して感じたことを少しばかり書かせて頂いた。師の思想などに関しては師の自伝の *Surviving the Dragon* 等の著作を参照して頂ければ幸いである。

藤井明（東洋大学大学院博士前期 2年）

落語と仏教③

夏です！毎日暑いですね～！

さてさて、夏の風物のひとつに「怪談」があります。皆様ご存知のとおり落語にも「怪談噺」というジャンルがあります。有名などころでは明治時代の犬養木堂・三遊亭圓朝の作『牡丹灯籠』、『真景累ヶ淵』、先日の赤坂大歌舞伎でも上演された『乳房榎』などなど。これらは幽霊が出てくるシーンが有名ですが、実は長編の連続物(寄席で毎晩一話ずつ口演していく噺)で、全体を通すとあまり幽霊は出てこないんです。

では何故に怪談と銘打たれるかといいますと、これらに共通しているのは人間の業の深さ、執着による迷い、悪しき因縁の連鎖といったものから生まれる「恐怖」をテーマとしているからです。いきなり仏教用語連続ですが、明治当時は文明開化の気風から科学的、哲学的に物事を解釈していく風潮が強く、井上円了先生が妖怪学で著したように、前時代的な迷信は否定されていきました。ですからむしろ仏教哲学を前面に押し出した作品づくりがなされたといえます。

ちなみに円了先生の言った「怪現象は神経のせいである」というところから、神経＝真景累ヶ淵という洒落でもあるのですよ。「神経」は当時の流行語、大正時代は「電気」ですね。電気ブラン好きです。「ん？何だそれ？」という若人は浅草に行って探して飲んでみるべし。…失礼、話が脱線しました。

怖いばかりが怪談ではなく、滑稽噺に属する怪談もあります。

閻魔を買収するという理由で、娑婆に残した金を取りに現れる『へっつい幽霊』。「地獄の沙汰も金次第」という諺を本物に当てはめてしまった世界観で、死の王 yama も形無し。もっとも閻魔の役人だから買収もされるのか。昔は埋葬するとき出家の意味で頭髪を剃ったため、髪が伸びるまで化けて出られなかった内気な幽霊の『三年目』。その他、掛け軸から出てきて酒を酌み交わす『応挙の幽霊』、ご存知、番町皿屋敷の陽気な後日談『お菊の皿』、質草に魂が宿る『質屋庫』等々…。

これらはこの時期にはわりと寄席で掛かる噺です。この世に未練があって成仏できないとはいえ陰陰滅滅とす



谷中・全生庵所蔵の圓朝コレクションより丸山応挙の幽霊画。夏季には一般公開されています。

² 密教文化研究所編『弘法大師全集 第四輯』密教文化研究所、昭和四〇年、p.219

³ 密教文化研究所編『弘法大師全集 第一輯』密教文化研究所、昭和四〇年、p.538

⁴ 辻直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波書店、昭和四五年、pp.307-308

るばかりでなく、こんな連中もいたっていいよな、という人間味溢れる幽霊ばかり。
ま、仏教では魂は輪廻するから幽霊にはならないんですがね…。

※宣伝！ 八月中旬に新宿末広亭で夏の特別興行／詳細は「伝枝」でHPを検索してください。

春風亭伝枝（仏教会会員）

倉田百三と西田幾多郎 ③



石川県かほく市の西田幾多郎記念哲学館に保存されている西田幾多郎の書斎「骨清齋」（こっせいくつ）

『善の研究』（1911）に感銘を受けた倉田百三は、京都に住む西田幾多郎に対して 3000 字に及ぶ情熱的な手紙を送り、西田との面会を熱望した。そして大正元年（1912）9月8日、京都の西田宅にて対面を果たしている。

面会の三ヶ月後、倉田は一高の『校友会雑誌』に「生命の認識的努力 西田幾多郎論」を発表する。西田の思想について解説したこの論文は、後に小論集『愛と認識との出発』（1921）に掲載されることにより、『善の研究』が哲学書として異例のベストセラーとなるきっかけとなった。

この中で倉田は、西田の思想を「厳粛なる経験主義（radical empiricism）」と紹介している。「根本的経験論」とも訳されるこの言葉は、アメリカの哲学者ウィリアム・ジェームズ（1842-1910）によって提唱されたものである。ジェームズは、主観と客観が区別される前の直接的な経験を「純粹経験」と呼び、これが現実世界を構成する最も根本的なものと考えた。西田はジェームズの「純粹経験」という言葉を用い、主客が分かれる前の意識現象が真の实在と主張したのである。

一方で倉田は、西田が「純粹経験」を重視するとはいっても、人間の主観を絶対視する「唯心論」ではないことをあわせて強調している。

[倉田]「しかしながら注意すべきことは氏（筆者注 西田幾多郎）は口を極めて唯物論者を非難しているけれども、けっして主観のみの実在性を説く唯心論者ではないことである。（中略）主観と客観との差別のない、物心を統一せる第三絶対者をもって实在とするのである。」（『愛と認識との出発』『生命の認識的努力』）

西田は『善の研究』の中で「自己」を「意識の統一者」と説明している。つまり、自己の根柢に「統一力」があり、この働きによって「昨日の意識」や「今日の意識」といった個々の独立した意識を統一され、「主観的意識」としての「自己」が成り立っているというのである。

更に西田は、このような「統一力」が宇宙現象といった「客観的世界」の背後にも存在すると考えた。「主観的意識」は統一する側から、「客観的世界」は統一される側から同じ实在を見ているだけであって、決して別のものではない。両者の背後に同じ「統一力」があるからこそ、自己（主観）は宇宙（客観）を理解できるという。

[西田]「我々のいわゆる客観的世界と名づけている者も、幾度か言ったように、我々の主観を離れて成立するものではなく、客観的世界の統一力と主観的意識の統一力とは同一である（中略）この故に人は自己の中にある理に由って宇宙成立の原理を理會することができるのである。」（『善の研究』第二編第六章）

主観を離れて客観はなく、客観を離れて主観はない。そう考えると、自己という「主観」が絶対的なものと信じることはできなくなる。西田の認識論に触れることにより、倉田は自らが陥っていた「独我論」から抜け出す手がかりを得たのである。

山口修三（仏教会会員）

興福寺の日常③

いささか宣伝じみてしまうのですが、興福寺は本年9月3日より上野の東京藝術大学大学美術館にて旧東金堂本尊であった薬師如来の仏頭を主とする展覧会を開催いたします。また、今年から私が東金堂責任者となったこともあり、今回は「興福寺の日常」というタイトルからは少し逸れるかもしれませんが、東金堂のことについて少しご紹介したいと思います。

興福寺では通常、内部拝観できる施設は東金堂と国宝館の二箇所だけです。東金堂は薬師如来と日光菩薩・月光菩薩・十二神将・四天王・文殊菩薩・維摩居士・正了知大将を安置するお堂です。国宝館は旧東金堂本尊の仏頭や阿修羅像などの、本来の安置場所に戻せない仏様方を安置しています。

東金堂はその名の通り東にある金堂です。金堂というのはお寺のメインとなる建物、一般的な言葉で言えば「本堂」を指す言葉ですが、興福寺はかつて三金堂形式のお寺でした。すなわち本堂である中央の中金堂、その南側に向かい合って建てられた西金堂と東金堂がありました。しかし1717年の火災で中金堂と西金堂は焼失。現代に至ってようやく中金堂の再建が始まりましたが、西金堂は跡を残すのみで、金堂としては唯一、東金堂のみが残っている状態です。

現在の東金堂は室町時代に再建されたもので、現在のご本尊薬師如来もそのときに造られたものです。それ以前には、今回出陳される銅造仏頭が完全なお姿で鎮座なさっていました。1184年、平家による南都焼討で全山灰燼に帰した興福寺は、その後なんとか復興し、東金堂も再建されたのですが資金難か、お堂はできたのに肝心のご本尊が造られない状況でした。1187年その状況に我慢ならなかった東金堂の僧兵たちが、当時興福寺と対立関係にあった飛鳥の山田寺から薬師三尊像を強奪してしまったのです。その知らせを聞いた当時の藤原氏長者、兼実はトラブルを恐れて、搬送中に「山田寺に還すように」との命令を出したのですが僧兵たちは聞き入れず、そのまま東金堂に運ばれました。しかし後に兼実が東金堂を訪れたときには「この仏は東金堂にこそふさわしい」と言って僧兵たちの行動を黙認したと伝えられています。

その後1415年に起きた火災でお堂とともに運命を共にしたこの本尊は、ながらく完全に失われたものだと思われていました。しかし1937年、現在の本尊の台座の内部に、正面を向く形で安置されていたのが発見されました。興福寺の先々代貫首が発見当時の様子を「老僧が連絡等のため境内を走り回っていた」と語っています。

日本尊はおそらく火災の際に、お顔の左側から地面に落下したのでしょう、左耳たぶが欠け左頬が歪んでいます。それでいながら、寂靜の相は全く崩れることなく、私達に慈悲の眼差しを向けてくださっています。

板野弘映（仏教会会員）



タイの仏教事情⑮

—タイの寺院 (4) —

前号の続きとして、タイの寺院について紹介したいと思います。

礼拝堂の形

スコータイ時代の礼拝堂は、基台が高く壁がなく、本堂より大きく建てられていました。それは当時僧侶の毎日のお勤めを本堂でなく、礼拝堂で行っていたからです。アユッタヤー時代になっても、礼拝堂はスコータイ時代と同じように本堂より大きかったのですが、壁が取り付けられました。入り口は、前と後ろにありました。

両方の壁には、空気抜きが付けられました。また、プッターワート（仏様の地域）のまわりに仏像を置くために小さい礼拝堂が造られるようになりました。

ラーマ4世の時代まではよく礼拝堂を建てましたが、それ以降はあまり建てなくなりました。なぜなら礼拝堂にはただ仏像を置くだけで、他の宗教儀式などには使われなかったからです。

礼拝堂は大きさによって次のように様々な種類があります。

1. 仏塔の前の礼拝堂（ウィハーンプルワン）

この礼拝堂は大きくて、仏塔のすぐ前に建てられる境内で最も重要な礼拝堂です。

2. 方角の礼拝堂（ウィハーンティット）

方角の礼拝堂は、重要な仏像を安置するために本堂の東西南北に建てられます。

3. 本堂のまわりの小さな礼拝堂（ウィハーンラーイ）

この礼拝堂は本堂のまわりの塀の外に建てます。壁があるものの中には、仏像が置いてあります。壁がないものは、サーラーラーイともいいます。

4. 小さな礼拝堂（ウィハーンノーイ）

この礼拝堂を建てる位置は、決まっていますが、本堂の隣に建てるころもあります。ウィハーンノーイには重要な仏像を置きます。

5. 曲がった礼拝堂（ウィハーンコット）

曲がった礼拝堂は、プッターワート（仏様の地域）の隅に仏像を安置するために建てられます。この礼拝堂は、建物の中程で直角に曲がってL字形をしています。

6. ほこらの礼拝堂（ウィハーンクレープ）

ウィハーンクレープは礼拝堂の中で最も小さい礼拝堂です。たいてい他の建物から離れて建てられ、一番最初の住職の像がここに置いてあります。即ち、寺院のほこらのような場所です。この礼拝堂はチエンセン、スコータイ、アユッタヤー時代にはたくさんありましたが、ラッタナコーシン（バンコク）時代になってからだんだんなくなっていきました。

回廊

回廊は塀のようなもので、上部には屋根があり、寺院の重要な建物を囲んで建てられます。内側にはたいてい仏像が安置されていますが、壁画が描かれている所もあります。

集会所（サーラーガンパリアン）

集会所は高床式の大きい建物で人々が説法を聞いたり、仏像を安置したりする場所として使われています。ウィハーンがだんだん造られなくなってから集会所が造られるようになりました。

（この記事は、チュラーロンコーン大学成人教育センターにより出版した「タイ文化の魅力 歴史 美術 建築 他 観光ガイドの手引き」pp.90-92を参考にして執筆したものです。）



タイ寺院の集会所（サーラーガンパリアン）

プラマハチャップン（Phramahāchatpong Katapuñño 仏教会会員）

～「日本文化と仏教」⑨～

ヘルマン・ヘッセ『シッダルタ』の遍歴と悟り

仏教会会員 作家 永田道子

本コラムは仏教が日本の文化・芸能に与えた影響を紹介していくものだが、今回は番外編、西洋である。

エストニアのバルト・ドイツ人の父とスイス系ドイツ人の母をもつヘッセ(1877～1962)は、西洋と東洋、キリスト教と東洋思想という異文化の狭間の落とし子だった。母はバーゼルの宣教師だった父親の仕事の関係でインドで生まれたというから、彼がのちに東洋思想に関心をもつのはこの祖父と母親の影響かもしれない。

幼少期から精神的に不安定な子だったのか、14歳で神学校に入学したものの半年で脱走、悪魔祓いをしたが自殺未遂、精神病院に入院させられた。その後、ギムナジウム(中高一貫校)に入学するも続かず、見習い書店員の仕事も3日で逃げ出してしまった。この青春時代の苦悩をもとに書いたのが『車輪の下』(岩波文庫所収)である。

その後もさまざまな仕事を転々としながら作品を発表、精神的に安定して3人の子にも恵まれ、インドとその周辺を巡る旅にも出た。だが第一次世界大戦前後からふたたび精神的に危うくなり、スイスの田舎町に移り住んで静養しつつ、ユングの弟子らの助けを借りてやっとのことで回復を遂げた。その苦悶の前後で執筆したのが『デミアン』である。それを機に、牧歌的でノスタルジックな作風から現代文明への痛烈な批判と精神世界への深い思索の作風へと激変。その成果が『シッダルタ』(岩波文庫所収)に結実した。

ひとりの求道者シッダルタ(釈尊ではなく婆羅門の若者で、釈尊は世尊ゴータマとして登場する)の精神的遍歴の物語である。幼時から学問にはげみ、聡明で思索的、美貌も兼ね備えて両親や周囲の誰からも鍾愛されて育ったシッダルタは、ある日、町にやってきた遍歴の沙門たちを見た。日焼けして埃と血に汚れきったからだを腰布一枚で覆い、世に容れられず世を容れず、無言の情熱と捨身の熱気が人々の面を打つ求道者たちである。感銘を受けたシッダルタは父の反対を押し切って家を出、やはり婆羅門の子で親友のゴヴィンダとともに沙門たちが修行している森に入った。

身を刻むような苦行の日々も3年が過ぎ、これが本当に悟りへの道かと疑念を持ち始めた頃、仏陀ゴータマが弟子たちを引き連れて舎衛城にやってきて人々の崇拜を集めていると知り、ゴヴィンダとともに祇園精舎を訪れた。説法を聴いたゴヴィンダは歓喜して弟子になることを決意し、「シッダルタ、君も」と熱心に誘うが、シッダルタは首を縦に振らなかった。

無二の親友と別れてひとりになったシッダルタは世尊に出くわし、勇気を奮いおこして問いかけた。

「世尊よ、あなたは完全な、けっして中断されることのない鎖、因と果によりなる永遠の鎖として世界を示されました。いまだかつてこれほど明瞭に観取され、これほど否定の余地なしに説いた人はおられません。あなたは死よりの解脱を得られたが、しかしそれは世尊みずからの道程により、瞑想、沈潜、認識、開悟によって得たのであって、教義によって得たものではありません。何人(なんびと)も教義によって解脱を授けられはしません。世尊は言葉と教義によって、成道の瞬間に世尊の心に起こり給いしことを、伝えまた語ることはできないのでございます。正覚に輝く仏陀の御教えは多くの内容を含み、多くの者に、正しく生き悪を避けよと教えられます。しかしながらこの明らかな尊き御教えには、世尊御自身が体験し給いしこと、百千万人のうち世尊のみが体験し給える秘奥は含まれていないのでございます。これがわたくしの遍歴をつづける理由でございます。けっして他の、よりよい教えを探すつもりはございません。これ以上のよい教えがないことを承知しております。あらゆる教えとあらゆる師とを去って、ただひとりわたくしの目標に達すること、然らざれば死することがわたくしの意図でございます。もしも弟子になりましたら、わたくしの自我はただうわべだけ、見せかけだけ安静を得、解脱に達するだけで、じつはその自我は生きつづけ、いっそう増大していくのではないかと恐れるのでございます。なぜなら、その場合、わたくしは世尊の教え、世尊への師事、世尊への愛、僧たちの教団を、わたくしの第二の『自我』と認めてしまうのでございましょうから」

世尊は慈愛に満ちた明らかな声でこたえた。「婆羅門の子よ、御身がかくも深く考えをめぐらしたことのめでたさよ。わたしの教えの中に誤りを見出した。なおそれを思索し追及するように。ただ、求知の心に燃ゆる人よ、

もろもろの意見の迷路と、言葉の争いに陥ることなきよう心されよ。大事なことは意見ではない。意見はさまざまにある。美しきも、醜きも、また賢しきも愚かしきもある。いかなる意見は何人もそれに味方し、また敵対することができる。わたしの教えの目的は、世界を求知の心に燃える人々のために解明することにあるのではない。その目的は苦悩よりの解脱である。他の何ものをも説いているのではない」

世尊と別れたシッダルタはさどった。彼の青年時代をつらぬいて彼につきまとい彼を離れなかった或るものが、今や彼の中に存在しなくなったことを。師をもち、教えを聴こうとする願望である。彼の進路に現れた最後の師、最高の賢者たる師、至上の聖者、仏陀をさえ彼は棄てたのだ。仏陀からさえ離れなくてはならなかったのだ。仏陀の教えさえ受容することができなかったのだ。

彼は自身に問う。自分が教えや師から学ぼうと思っていたのは何なのか。それは自我の意義と本質だった。「自我からの離脱、超克を願っていたのだ。わたしはシッダルタであるという謎こそ自分の心を疲れさせたものはない。そして他のあらゆることより、それを知ることが少なく、何も知らず、未知の存在だ。その原因はひとえに自身を恐れ、避けてきたからだ」

「真我(アートマン)をわたしは求めた。梵(ブラフマン)をわたしは求めた。わたしはわたしの自我を砕き、殻を破り、その未知の内部からあらゆる殻の核心、真我、生命、神性、究極なるものを探り取ろうとしていた。しかしそのときわたし自身というものは、わたしの手から逃げ去ってしまっていた。これからは自身を師にして学ぶのだ。わたし自身の弟子になり、シッダルタという秘密を知ることが学ぶのだ」

彼は全身に長夜の夢から覚めた深い感動をみなぎらせ、今はじめて世界を見るようにあたりを見廻した。世界は美しかった。色とりどりで謎と奇異に満ちあふれ、空に雲が流れ、河が流れ、森が静まり、山が坐していた。

ひとり放浪をつづけるシッダルタはやがて大河のほとりで「河がすべて教えてくれる」と静かに語る渡し守のヴァズデーヴァに出会った。たどり着いた大きな町の入口のすばらしい林苑で、その主である美しい遊女カマラを見て、一瞬のうちに恋に落ちた。彼女から性愛の喜びを学び、町一の大商人のパートナーになって事業を営み、莫大な財と名誉を得る身になった。こうして世俗に埋没し、享楽と賭博に明け暮れて放埒な20年の歳月を送ったシッダルタは、ある日、おのれの魂の弛緩と肉体の老いに気づいて愕然とし、何もかも棄てて出奔する。

絶望に河に身を沈めて死のうとした瞬間、彼の口から「オーム」のつぶやきが漏れ出た。真理を求める魂はまだ枯渇してはいなかったのだ。そのまま倒れ伏してこんこんと眠る彼を介抱してくれたのは行脚の途中のゴヴィンダだった。ふたりはしみじみ語り合い、それでもシッダルタは世尊に帰依しようという気にはならなかった。

「師はもたない。誰からも教えは受けない」ふたたびそう決心し、昔出会った渡し守ヴァズデーヴァに頼み込んで一緒に渡し守の仕事についた。ふたりはほとんどしゃべることなく黙々と働き、淡々と生き、やがて人々は彼らを「河の聖者」と呼ぶようになった。

やがて釈尊の臨終が迫り、駆けつけるべく河を渡ろうとする人々が続々と集まってきた。その中にはかつての愛人カマラもいた。彼女はシッダルタと別れてから生んだ彼の少年シッダルタを伴っていた。だがカマラは毒蛇に咬まれて絶命してしまい、シッダルタは子を託された。

世俗の執着はすべて捨てきったはずだったのに、彼はわが子への盲目の愛に溺れていく。だが都会で豊かに自由気ままに育った驕慢な少年は、父の暑苦しい愛と貧しさと単調な日々の営みに我慢できず逃げ出してしまった。町の入口まで追いかけたシッダルタは、過去をまざまざと振り返らずにいられなかった。自分も父をふり捨てて家出したこと、カマラと出会って性愛に耽溺し、世俗の富と享楽を追い求めたこと、数々の過ちは煩悩の苦そのものだった。自分もまた、虚栄心と食欲と欺瞞に翻弄されて生きている人々となんら変わらない人間だった。彼ははじめて世間の人々を愛おしく感じた。愚かさゆえに苦しみ、苦しみながら生きる、その盲目的な力、強靱さ。それはいかなる智者や賢者にも劣らぬものだ。

「一切衆生の中に、成りつつある仏陀、可能なる仏陀、かくれた仏陀がいる。邪悪な罪人にも、この河の流れにも石ころにも、風も雲も鳥や虫も皆、神性を有し、多くを知り、多くを教えている。いっさいは完全、いっさいは梵なのだ」それが求道者シッダルタがたどりついた「自身の悟り」だった。

故国ドイツにヒトラー政権が誕生すると、平和主義を唱えていたヘッセの作品は「時代に好ましくない」と烙印をおされ、国内での出版が禁じられた。ヘッセはスイスで執筆活動をつづけ、第二次大戦終結後の1946年、ノーベル文学賞とゲーテ賞を受賞。

(手塚富雄訳『シッダルタ』本文中から恣意に引用した)

《書籍・イベント情報》

《書籍》

・『宗教について - 宗教を侮蔑する教養人のための講話』
F.シュライアマハー / 著 深井智朗 / 訳 (春秋社 4200円)
宗教の本質は宇宙の直観と感情であると喝破し、その法悦を愛の喜びにも似た甘美な筆致で描写して、キリスト教の枠をも超え、宗教哲学の祖となったシュライアマハーの『宗教について』を半世紀ぶりに新訳！ その衝撃をストレートに伝えるべく、底本に 1799 年刊の初版を用い、後世の恣意的な解釈を廃し、当時シュライアマハーが置かれていた時代背景や思想・精神状況を精査して、本書に託された真の意味を探る充実した解題を付す。少しでも宗教に興味のある人には必読必携の一冊。

・『インド初期密教成立過程の研究』

大塚伸夫 / 著 (春秋社 23100円)
密教は、仏教の中でどのようにして成立し、発展したのか。この密教にとって最も重要なテーマを、梵・蔵・漢の膨大な文献資料を渉猟して徹底的に研究。「雑密」と呼ばれ、これまであまり研究の進んでいなかった初期密教に光をあて、その輪郭をより鮮明に浮かび上がらせた世界初の画期的かつ総合的な研究書。ダラニ、神呪、真言、印契、マンダラ、灌頂などの密教的要素や主要經典の展開のプロセスをはじめ、諸々の実践法や密教修行者の実態、さらには十一面観音や不空罽索観音の画像法とマンダラの構造に至るまで、密教に関するあらゆる要素を幅広く論じた本書は、密教関係者必読の書であるばかりでなく、大乘仏教や仏教美術の関係者にも有益です。

・『ブッダの冠 - 仏・菩薩の持ち物 (考)』

西村実則 / 著 (大法輪閣 1890円)
前著『修行僧の持ち物の歴史』をもとに一般向けにリライトした書。香・数珠・冠・葉などについて記載する。

・『ブッダとは誰か』

吹田隆道 / 著 (春秋社 1995円)
「知恩」連載のブッダの生涯と教えについての記事を一冊にまとめたもの。ブッダは一人の人間でありながら、神話化の対象ともされてきた。このことは私たちに何を教えてくれるのだろうか？ さまざまな言語で伝承された文献を時代背景とともに比較検討し、ブッダ入滅までの足跡を丁寧にたどる。近年の学術的成果から、ブッダに思いをはせた過去の人々の熱い息吹までを伝える、すぐれた入門書。

《イベント》

・根津美術館コレクション展 曼荼羅展-宇宙は神仏で充滿する!-

本展では、根津美術館コレクションより、日本中世の密教曼荼羅や尊像画、浄土曼荼羅、垂迹曼荼羅など選りすぐりの絵画作品約 40 件を展示いたします。このうち重要文化財の「大日如来像」と「愛染曼荼羅」は、近年行われた修理後、初めての公開になります。夏のひととき、崇高で力強い、仏画の宇宙をご体感ください。

日時：7/27(土)～9/1(日)

午前10時～午後5時 (入場は午後4時半まで)

観覧料：一般1000円 学生800円

会場：根津美術館(東京メトロ表参道駅より徒歩10分)

・大橋新太郎生誕150年記念企画展 「ほとけのすがた-金沢文庫コレクション1-

本年は県立金沢文庫設立に貢献した大橋新太郎の生誕150年にあたり、これを記念して収蔵の名品を2期にわたって特別公開。本展では、徳治三年(1308)に院派仏師により製作された釈迦如来立像(重要文化財)など珠玉の仏教美術をご覧いただき、金沢文庫の復興に尽力した大橋新太郎の偉業をしのびます。

日時：6/14(金)～8/4(日)

午前9時～午後4時30分(入館は4時まで)

観覧料:成人250円 20歳未満の学生150円 65歳以上及び高校生100円

会場：中世歴史博物館 神奈川県立金沢文庫(京浜急行「金沢文庫」駅より徒歩12分)

・大妖怪展 -鬼と妖怪そしてゲゲゲ-

中世から近世までの日本の妖怪変化の歴史を、能面・絵巻・浮世絵・版本などの優品で辿り、現代の妖怪を代表する水木しげる氏の「ゲゲゲの鬼太郎」へと繋がる妖怪の系譜を見渡します。能面では鬼神や男女の怨霊の面、絵巻に見られる鬼や天狗など、まさに百鬼夜行の世界。イメージ豊かな妖怪世界にご案内。そして勿論、妖怪博士としても有名な井上円了についても…。

日時：7/6(土)～9/1(日)

午前10時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

観覧料：一般1200円 大学・高校生700円 中学生以下無料

会場：三井記念美術館(東京メトロ三越前駅より徒歩3分)

～ 東洋大学仏教青年会・仏教会、今後の予定 ～

《行事》

国際仏教徒青年交換プログラム

開催日：平成25年8月25日（日）～8月30日（金）

集合場所：築地本願寺 第一伝道会館

開催地：福島県いわき市

参加対象者：申し込みの上、本会の推薦を受けた一般青少年（16歳以上30歳以下）

定員：日本国内より35名

参加費：無料（東京都内集合までの交通費は自己負担となります）

主催：全日本仏教青年会（JYBA）

《語学勉強会》

※勉強会についてのお問い合わせは下記の連絡先にお願いいたします。（会員は無料で参加できます。）

○仏教漢文講読会

講師：佐藤厚

日時：隔週土曜4限

内容：「懺悔文」、「般若心経」など、よく知られた偈文や經典類などを材料に漢文および思想の解説をします。読誦や歌にも力を入れて身に付く講義を目指します。参加希望者は佐藤<sato_inbuds@yahoo.co.jp>までご連絡ください。

○サンスクリット文献勉強会

講師：出野尚紀

日時：隔週金曜6限

内容：『アヴァダーナ』を読みます。初心者大歓迎です。参加希望者は鈴木<li1000041@toyo.jp>までご連絡下さい。

○チベット文献講読会

講師：石川美恵

日時：隔週月曜 18:30～20:00

会場：6号館4階6408教室

内容：ツォンカパの『ラムリム』『菩提心の儀軌』の章を読みます。チベット語初心者も歓迎です。参加希望者は石川<danakoshajp@yahoo.co.jp>までご連絡下さい。

BDK 復興支援 学生ボランティア活動

主催：公益財団法人 仏教伝道協会

期間：平成25年9月4日（水）～9月7日（土）

ボランティア先：気仙沼市

ボランティア内容：漁業支援・海岸清掃等

定員：40名

資格：仏教精神を建学の精神や教育目的に掲げる大学で学ぶ学部生（学部学科不問）※全行程参加可能な方に限りません。

宿泊先：ホテル一景閣

参加費：無料 ※但し、往復の交通費は各自負担。

いずれのイベントも詳細は東洋大学仏教青年会のホームページ（<http://www.toyo-yimba.org/>）でご確認ください。

※随時会員を受け付けています。入会希望者は下記までご連絡下さい。会員規約・活動内容・受付手続きなどの詳細はホームページ<<http://www.toyo-yimba.org/>>をご覧ください。また、紹介したい行事や掲載したい記事などがございましたら、下記のアドレスまでご一報下さい。

編集後記

暑い日が続きますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。雪国出身の私は恥ずかしながら編集中に体調を崩してしまいました。皆さんも水分を適度に補い、夏バテ対策をしっかりと講じてくださいませ。

編集責任者：鈴木洋志（インド哲学科4年）

東洋大学仏教会

卒業生、一般：年会費3000円、特別賛助一口5000円

東洋大学仏教会事務局長 岩井昌悟

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学インド哲学科第8研究室気付

Tel: 03-3945-7393(-7357) E-mail: tba.bussei@gmail.com

東洋大学仏教青年会

学生：年会費1000円

東洋大学仏教青年会会長

ウルジージャルガル

db0900044@toyo.jp

URL: <http://www.toyo-yimba.org>